

不思議な酒樽
(大崎)

上西だより

～上西校区集落支援員だより～

西之表市地域支援課
上西集落支援員
馬場 信一 編集
連絡先090-9579-3953
上西校区長責任発行

明治の終わりごろのことである。

神主が早朝の参詣をするために大崎塩屋神社の前の海辺にシュエイ（潮井）を汲みに行った。少し沖に真っ平の石に一尺周りくらいのきれいな樽が座っていた。



「これは不思議なことじゃ」と拾ってみると、墨字で奉納天照大神長崎樺島村杉田増次と書いてある。神主は驚いた。なぜ長崎から遠く離れたこのシュエイ取り場に流れついたのだ。

このことを西之表の神官に伝えると、「これは珍しい。これを機会に大きくとりあげねばならぬ」という意見が出され、長崎の杉田増次に手紙を送った。



すると、さっそく返事が来た。

「自分は重病にかかり、もうろうとして何日か過ごしていたら、ある日、白髪の老人があらわれた。『天照大神を信仰すればお前の病気は治る』と告げられた。樽を海水の力でどこかに奉納してくれるだろうと思い、酒樽を数個作って海に流した。」



これが種子島大崎の塩屋神社前に流れ着いたのである。実は、この酒樽が着いたころには杉田増次の病気はすっかり治り、元気に働いているということであった。

大崎塩屋神社



現在、ふれ役の大崎芳和さんが青年部で活躍していたある冬のことである。西風が吹き荒れ、漁ができないときのアルバイトとして仲間とスラッジ集めをしていた。青年部の資金の足しにするためである。すると仲間が漂流ビンを見つけた。そこには手紙が入っており、長崎発で日付は昨日である。このことから、芳和さんは「このような日にはビンが一日で大崎に届くから、酒樽の話は本当のことだったのだ」と実感できたと驚きながら語りました。

この酒樽は今も大事に保管され、毎年1月2日の塩屋祭で披露されます。その際は神棚で静かに神事を見守っているのです。（取材協力；大崎芳和さん・秋山英行さん）